



作家  
元国際線乗務員  
**黒木安馬**

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)などがある。  
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ！———人生・農業リセット再出発 195

## 海賊と手を組んだ寿司屋

ソマリア沖の海賊がいなくなったのには日本人が関与しているとハーバード大学報告やCNN、BBCで放送され、世界の問題になった。国費留学時代の仲間に国連大使など複数の大使もいる。同窓会で、その日本人が誰か知っているか?という話題が出た。

地中海からスエズ運河を通過してアラビア半島イエメンとアフリカ大陸エチオピアの間にある紅海を南下してソマリア沖アデン湾を抜けるとインド洋に出る。欧州とアジアを結ぶ海路の大動脈で、年間2万隻の商船が往来する。その海域で機関銃やロケット砲で武装した海賊が出没し、年600名の船員が人質になって莫大な身代金を要求されて国際問題となっていた。それが、2013年頃から急に海賊がいなくなった。

**築**地の「すしざんまい」社長は、初競りでマグロを1億円超で買い上げる、話題の木村清氏。面会して話を聞いた。ソマリア沖はマグロが獲れる良い漁場だが海賊騒ぎで漁が出来ない。海賊に会って話を聞こうとソマリアに出かけた。内戦が続く貧困は目の前を往来する世界の「宝船」に目を向けさせ、漁師は強盗と化して海は無法地帯になった。

好きで海賊をしているわけじゃない、生きるためだと言う。じゃあマグロを獲れば良い、漁の方法は教える、漁船も調達して冷凍倉庫は私が整え、マグロは全部私が買い上げよう! やがて、年間300件以上も発生していた海賊被害はハタッと消滅した。ただ海賊が消えて平和になると困る業界もあることを知った。保険会社!

**木**村清、1952年千葉県野田生まれ。4歳で父親が死亡、中卒15歳で航空自衛隊に入隊し、パイロットを夢見たが叶わず。大学の通信教育で司法試験を目指しアルバイトを転々、看護師と結婚。2001年、日本初の年中無休、24時間営業「すしざんまい」を開業。

築地市場は10数年前まで競り市が終われば

シャッター通りになった。トラック運転手は競りまで夜中の暗闇で待つしかなく、食事をするところもない。そこに24時間営業・年中無休の寿司店を作ると言う、新鮮ネタを仕入れに来るプロたちが築地で寿司なんか食う者はいないと誰もが笑いものにしたが、夜中過ぎになると混み始める珍しい現象が起きた。目と鼻の先にある銀座で飲んだ客にホステスが食事をねだる。魚市場に美味しい寿司屋がある!と評判になった。

**築**地の魚は本場の新鮮なイメージが湧く。35坪、40数席の店だけで年間売り上げ10億円、1日の客回転率23.5という驚異的な店に成長。やがて築地は買い物と寿司の国際観光地として今日の繁栄となる。

新鮮ネタで美味い・安いと評判を呼び、加賀百万石の胃袋・近江市場にすしざんまいが新規出店したがすぐに閉店した。日本海は魚の名所、築地からネタ配送の魚は喰えないと近江市場に拒否され、すぐに閉古鳥が飢え死にした。

築地市場の豊洲移転問題で騒いでいるが築地も豊洲も農協と同じで不要! 街なかの魚屋さんが消えて産地直取引のスーパーが流通を支配する現実、市場に来る買い付け人は個人零細しかない。

マグロ漁獲量が激減したのは、中国人が刺身を食べるようになったからではなく、ツナ缶用に幼魚も一網打尽にするからだ、あと3年泳がせれば大きな資源になるのに、と社長から聞いた。

木村さんの母の口癖、「どんな金持ちでも乞食でも、穴に落ちた時に誰がロープを投げてくれるかわからない、人をよく観ておくように」。

木村さんは言った。

「人は何のために生きるのか? 何のために仕事するのか? 人生は明るく、楽しく、元気良く、志を持って生きよう! 大バカものと笑いにされるような発想のスタートこそが成功への道!」

哲学のある寿司屋さんである。